防衛庁長官政務官挨拶

ただ今、御紹介に預かりました防衛庁長官政務官の山下善彦でございます。このたび、第4回目の安全保障国際シンポジウムが開催されるに当たり、御参加を賜った各国の研究者の皆様、そして御来場の皆様に歓迎の言葉を述べる機会を得ましたことを大変嬉しく思っております。

さて、冷戦後の世界はグローバル化が進み、安全保障の課題も複雑になって参りました。遠く離れた地域における民族紛争や宗教対立、政治経済の破綻、あるいは大規模な自然災害などが、世界各国の平和と安定、そして安全保障政策に大きな影響を及ぼす時代となっております。

また、従来は国家間の戦いという意味で使われていた「戦争」という言葉の概念自体が変化し、国家以外の集団による武力行使や破壊活動が、安全保障上の重要な課題となって参りました。

米国で発生した同時多発テロ事件は、我々に、そのことを強烈に意識させる結果となりました。ここで改めて、憎むべきテロリズムの犠牲になった方々、そして米国民の皆様にお見舞いと哀悼の意を表したいと思えます。

我が国におきましては、昨年10月29日にテロ対策特別措置法などが成立いたしました。防衛庁・自衛隊も、テロは国家にとって21世紀の新しい脅威であり、単なる災害や邦人保護の問題としてではなく、自らの安全保障、安全確保に関わる事態であるとの認識のもと、艦船や航空機による米軍等への協力支援活動などを行っているところです。

こうした、日米間の緊密な協力関係を基盤とする緊急事態への対応を強化する一方、防衛庁・自衛隊では、より安定した安全保障環境を構築するため、国際平和や国際協力の推進に寄与するほか、関係諸国との間の安全保障対話や防衛交流を積極的に推進しております。

防衛研究所におきましても、諸外国の研究機関などとの間で二国間及び多国間のさまざまな防衛研究交流を行い、研究者という自由な立場で率直に意見を交換することにより、各国との相互理解と信頼醸成に寄与できるよう努めているところです。

このような背景のもと、このたび防衛研究所が主催する安全保障国際シンポジウムにおいて、「軍事力の本質」をテーマとする議論が行われることは、21世紀を迎えた我が国の安全保障を考える上で極めて意義深いことだと思います。本日から明日にかけてのシンポジウムには、米国、英国、韓国、イスラエル及び国内の著名な歴史研究者、安全保障研究者の方々が参加され、主として学術的な立場からの発表や研究者同士の忌憚のない意見交換が行われることでしょう。それだけに、我々防衛・安全保

障に携わる者としても、固定観念にとらわれない自由な議論の中から、国家及び地域の安全保障や軍事力の意義・役割に関する創造的なアイデアが出るのではないかと、大きな期待を寄せております。

そして、本シンポジウムを通じて、「国家」、「戦争」、「軍事力」といった安全保障を論じるための様々な基本材料が提供され、私たちの認識が深まり、我が国や世界の安全保障に関する議論がいつそう豊かなものになっていくことを期待してやみません。

最後に、遠路はるばるお見えになられた各国の研究者の皆様、コメントを頂く先生方、そして御来場の皆様に重ねて御礼を申し上げますとともに、本シンポジウムの成功を心から祈って、私の挨拶とさせていただきます。

平成 14 年 1 月 15 日
防衛庁長官政務官
山下 善彦